

国際地域創造学部・国際言語文化プログラムにおける「サービスマーケティング」を用いた「共育」プログラムについて

国際地域創造学部・教授 呉屋 英樹

1. はじめに

2018年設置の国際地域創造学部では、「グローバルとローカルを併せ持つ視野によって、地域社会における現代的課題の解決や国内外の産業・文化の振興に寄与できる人材を育成する」ことを中心的な教育理念としており、学士教育を通じて単なる知識の習得に留まらず、学生が地域課題に向き合い、現場での実践を通じて課題解決能力を培うことを重視しています。この理念を実現するため、国創学部・国際言語文化プログラム・呉屋英樹ゼミでは、新たに相互互恵的な「サービスマーケティング」型教育プログラムを用いた学士教育、「共育プログラム *iplus+*」（「アイプラス」と読みます）を実施しています。「*iplus+*」の名称には、「サービスの受援者と支援者の双方が、新たな気づきや成長（＝ラーニング）を得る」という理念が込められています。また「共育」には、学生が地域課題に取り組むことで連携する地域社会がより良くなるように、学生自身が *iplus+*を通じて自己成長を遂げることができるようとの願いが込められています。

※ サービスラーニングの定義

「サービスラーニングとは、地域社会に対する有意義な奉仕活動と、学術的な研究および内省的な学びを統合したアクティブ・ラーニングのひとつです」（Chan, Ngai, & Kwan, 2019）。

2. 新しい人材育成の試みと背景

地域に根ざした研究と人づくりは本学が重視している2018年の学部改組の理念です。これを鑑み国際言語文化プログラム・呉屋英樹ゼミでは、2017年度より地域と大学を結ぶサービスラーニング活動を行いつつ、そのあり方について模索してきました。過去6年間（～2022年度）は、図1のような行政主導の学習支援活動を通じて地域課題の解決に取り組みながら人材育成を行っていましたが、参加する活動が行政主導のトップダウン的であったため、以下のような課題が浮き彫りになりました。

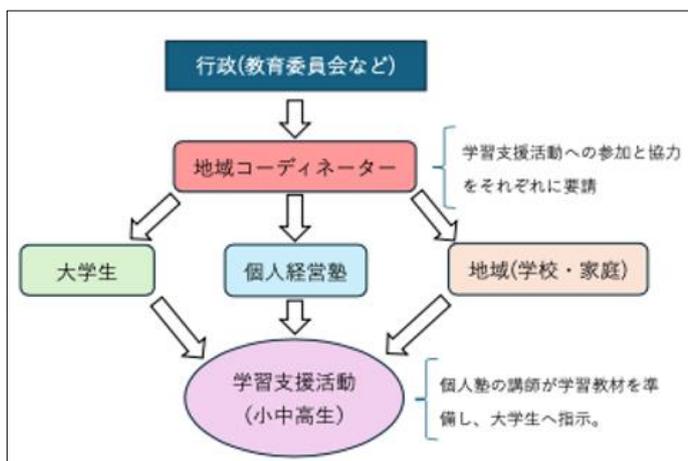


図1. トップダウン的サービスラーニングの活動形態

- (1) 大学生は講義課題の一部として学習支援に参加したが、1学期のみの参加のため、活動の意義や理念を十分に共有することができなかった。
- (2) 交通費や保険代などの必要経費は訪問校のPTAに依存しており、支出への理解を

得られないことがあった。

- (3) 職員異動や地域コーディネーターの交代など、人的要因にサービスマーケティングが左右された。
- (4) 学習支援の内容が塾講師の経験や善意に依存しており、大学生の支援が受け身となっていた。

上記 4 つの問題を抱えるトップダウン的な取り組みでは、人材育成に必要な教育活動の「持続性」と「発展性」を構築することが困難でした。「持続性」と「発展性」を構築するため、図 2 のような、研究調査（ラーニング）と社会実践（サービス）を往還するような「相互互恵的」サービスマーケティングの枠組みを構築し、関わるステイクホルダーにも学びが及

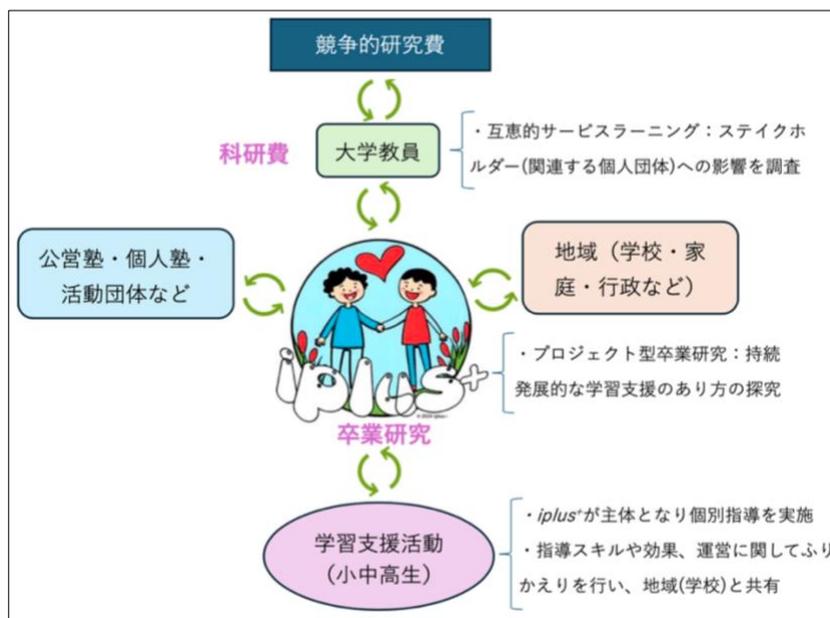


図 2. *iplus+*プログラムによる「相互互恵的」サービスマーケティング

ぶ「共育プログラム *iplus+*」を立ち上げ、3 年後期から卒業までの 3 学期（1 年半）で「持続発展的な学習支援のあり方」を探求しつつ、地域社会の抱える現代的課題に応えるため人材育成を目指すこととなりました。また下図 3 にあるように「共育プログラム *iplus+*」では、4 年後期学生が 3 年後期学生を育成する機会を設けることで人材育成に関わる教育活動の「発展性」を構築し、長期プロジェクトとして地域での社会活動に関する調査をゼミの中心テーマとして行うことで「持続性」を構築しています。

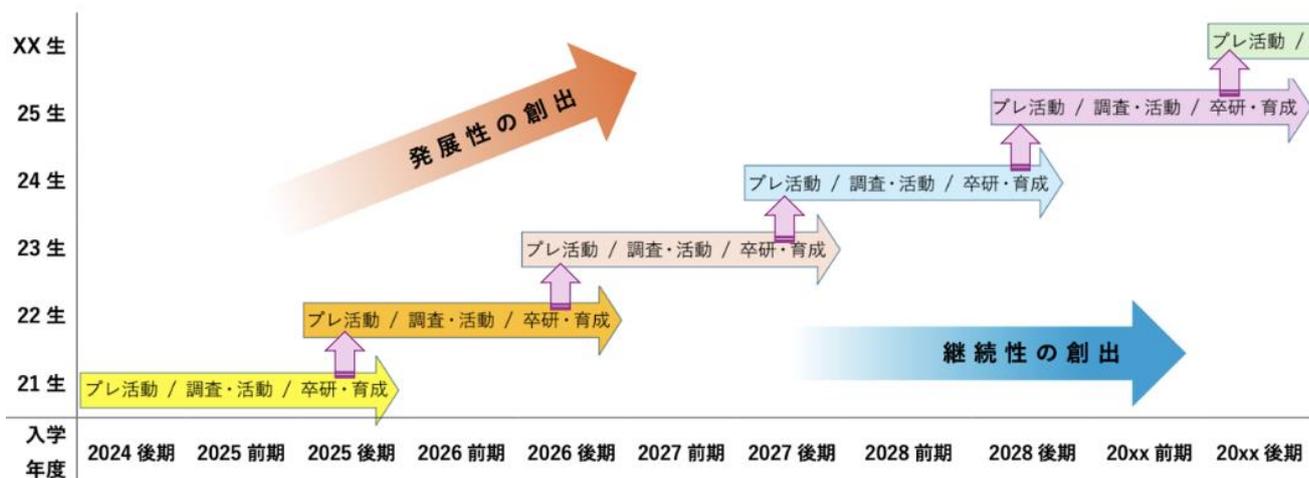


図 3. 「共育プログラム *iplus+*」で構築される「継続性」と「発展性」

3. 共育プログラム *iplus+*の目標

「共育プログラム *iplus+*」では、多様な社会活動（=サービス）を通じて沖縄県における教育に関する諸課題（教員の多忙化、子どもの貧困、大学生の社会経験不足、島嶼地域における教育格差、中学生の基礎的学力の不足など）の解決を目指すため、地域と連携しながら関連するステイクホルダー（外部団体・地域・大学）との相互互惠的な活動を通じ、本学部が目指す人物像の育成（=ラーニング）を行います。特に、以下の目標を追求しています。

- (1) 目標 1. 地域課題への取り組みを通じて大学生の実践力と主体性を育成する。
- (2) 目標 2. 地域社会への貢献を通じた大学の社会的役割を強化する。

4. 共育プログラム *iplus+* を通じた学び

2024 前期（3 年前期：学祭的学修）

- ・4月～8月：「地域・国際実践力演習Ⅰ」を通して国言プログラムの横断的な学びを行う

2024 後期（3 年後期：初期調査＋プレ活動）

- ・10月～11月：文献調査、テーマ設定、研究課題の設定
- ・12月：事前研修の実施（STEP 個別指導塾）
- ・12月：*iplus+* 活動（サービスラーニング）：伊江中学校（2024.12.14）
- ・12月：公開ゼミ（STEP 個別指導塾見学、伊江中学校での活動のふりかえり）の実施
- ・12月：卒論構想発表会（国際地域創造学部・国際言語文化プログラム・応用言語学領域）
- ・1月：*iplus+* 活動（サービスラーニング）：伊江中学校（2025.1.25）
- ・2月（学期末）：ふりかえりの実施
- ・2月：津堅小中学校への訪問（プログラム説明のための訪問）（2023.2.4～7 で調整中）
- ・2月：*iplus+* 活動（サービスラーニング）：伊江中学校（調整中）
- ・3月：*iplus+* 活動（サービスラーニング）：伊江中学校（調整中）

2025 前期（4 年前期：本調査＋活動）

- ・4月～8月：次年度ゼミ生の募集
- ・4月～10月：*iplus+* 活動（サービスラーニング）の継続と調査データ収集
- ・8月：プロジェクトの中間報告
- ・9月：*iplus+* 次期生のゼミ配属決定

2025 後期（4 年後期：調査報告＋活動引き継ぎ）

- ・10月～11月：*iplus+* 活動（サービスラーニング）の継続と調査データ収集
- ・11月～12月：データ分析と中間報告
- ・学期末：研究成果の報告
- ・10月～11月：*iplus+* 次期生への活動と調査の引き継ぎ（育成）

5. 今後の展望

(1) 共育プログラムの発展と継続

- ① *iplus+*で行っている学習支援活動を他地域へ展開し、支援対象を拡大したい。
- ② 予算面における持続可能な活動体制を構築するための仕組みづくりを推進したい。

(2) 研究と地域連携の深化

- ① 共育プログラム *iplus+*の成果を学術的に発信し、地方大学における地域課題解決型教育モデルを通じた人材育成の確立を目指したい。
- ② 行政機関や教育団体との協働を深化させ、地域に根差した支援体制を強化したい。
 1. 行政機関への聞き取り調査や家庭・学校へのアンケートを実施し、現場の課題やニーズを把握する。
 2. 使用済み学習参考書の回収と必要とする方への配布を通じて、リソースの有効活用を促進（Book bank の運用）する。
- ③ 他の学習支援団体（例：名護市学習支援教室「ぴゅあ」、今帰仁村公営塾「夢咲塾」、大学コンソーシアム沖縄「子供の居場所・学生ボランティアセンター」、など）と社会貢献活動や学習支援のあり方について情報共有と意見交換を実施したい。

6. おわりに

国際地域創造学部の教育目標を具現化するための取り組みとして、共育プログラム *iplus+*は、学生と地域社会の双方に成長をもたらす有意義なプログラムです。呉屋英樹ゼミでは、今後も地域社会との連携を深め、現代的課題に応えることができるリーダー性を備えた人材育成に取り組んでまいります。



活動①：事前研修（STEP個別指導塾での授業見学）



●日時：12月2日（月）、4日（水） 19：30～22：30

●場所：STEP個別指導塾（沖縄市）



4

4

事前研修における学びのふりかえり



1. 解く工程を「見える化」できるものを取り入れる（大きめの白紙や個人用のホワイトボードなど）。
2. 集中力を切らさないために座りっぱなしを防ぐ方法を考える（解答を生徒自身で取りに行くなど）。
3. 生徒が間違えてもいいと思える環境づくりを意識する。
4. 生徒が間違えたことを記録し、振り返る機会をつくる。また生徒の進捗状況はメンバー間でも共有する。
5. 生徒の声掛けについて、ポジティブな声掛けを意識し、躓いている場合は、取り組んでみての感想などを聞く。
6. 生徒の食い違いを防ぐために、指導の方法を統一することも考える。

5

5

活動② サービスラーニング：伊江中学校（1回目）



- 日時：12月14日 10:30~12:00
- 対象：伊江中学校の中学3年生 17名
- 場所：伊江中学校
- めあて
 - 学習支援の初期段階として、自己紹介とアクティビティを通して、生徒とコミュニケーションを図り、信頼関係づくりを学ぶ。

6

6

活動② サービスラーニング：伊江中学校（1回目）



7



8

活動②：中学生アンケートの結果

- 中学生対象のアンケートの結果（5段階評価の平均値）

項目1. 「活動の準備について」

- 活動に使った教材やプリントはわかりやすかった（4.6）
- 大学生と話しやすく、接しやすい雰囲気だった（4.7）

項目2. 「活動の内容について」

- レクリエーションやウォームアップの時間は楽しく、活動に参加しやすくなった（4.6）
- 学習支援の内容は、勉強に役立ったと感じた（4.7）
- 大学生の教え方や接し方は、わかりやすく、勉強に集中する助けになった（4.8）

9

9

活動②：中学生アンケートの結果

項目3.「活動後の気持ちについて」

1. この活動を通じて、勉強へのやる気が高まった (4.6)
2. 活動の後、友達や先生と活動内容について話す機会があった (4.6)
3. 大学生と話をすることで、将来の目標や夢について考えるきっかけになった (4.4)

項目4.「今後について」

1. またこのような学習支援活動に参加したいと思う (4.6)
2. 学校でiplus+の活動が続いてほしいと思う (4.7)

10

10

活動②：大学生のふりかえり

- ① 言葉だけの説明では生徒に理解してもらいにくい。ホワイトボードやバインダーなどを用いて、視覚的に指導できるようにする。
- ② 初対面の生徒に緊張感を与えない教え方や接し方を学ぶ。勉強タイムに入る前のレクを通して、生徒との距離感を縮める。
- ③ 生徒のレベルやニーズを把握せずに行ったため、事前にアンケートなどをして十分に準備して行いたいと思った。
- ④ アイスブレイクを通して私たち自身のことを知ってもらうことや、コミュニケーションを多く取り、緊張している雰囲気を緩和させる必要がある。
- ⑤ 「私は〇〇です！」の自己紹介シートを活用せずに終えたため、活用方法を考える。

11

11

活動②：大学生のふりかえり

- ⑥ 集中が途切れた場合には、勉強を強制させるのではなく進路や得意教科の話に持ち込むことで他の生徒にも配慮ができる。
- ⑦ 指導方法では、視覚的な説明があるとわかりやすいことから、補助ツールを使う。
- ⑧ 間違いの指摘について、ただ指摘すると生徒のモチベーションを下げてしまうが、ミスそのままにしては成長を止めてしまうため、指摘の方法について考える。（暗い雰囲気話さないなど）
- ⑨ 学習支援の環境について、一人一人で見られる生徒に限りがあり、生徒にかける時間に差が出てしまったことや、解き終えた生徒を放置することを防ぐために、学習支援の流れを事前に考える必要がある。
- ⑩ 活動に参加してみての生徒の意見や感想を聞き入れて改善につなげるために事後アンケートも必要だと思った。

12

12

活動③ 事後研修 公開ゼミ「共育と共創」

- 日時：12月23日（月） 13:00~15:00
- 場所：琉球大学 共有教育棟3号館 3-306
- 講師：STEP個別指導塾・塾長 安谷屋匡（あだにや・まさし）氏
- 事前準備



・「STEPでの事前学習」と「伊江中学校での学習支援活動」のレポートをそれぞれ各自で作成。

Ⅰ. レポート作成

① 各一部ずつ 「STEPでの事前研修(授業見学)」と「学習支援活動(伊江中)」

② レポートの形式は、【参考】レポート型に統一すること

① <何が学びとなった？> ② <なぜ、学びとなった？> ③ <学びをどう活用・実践していく？>

13

13



活動③ 事後研修 公開ゼミ「共育と共創」

14



15

活動③ 事後研修での学びのふりかえり



1. 学力と成績の違いを理解し、学習支援活動に役立てる。
☞「学力」は過去の自分との比較。「成績」は周囲との比較。まずは必ず伸びる「学力」を伸ばすことに貢献する。
2. 学力の一つである学ぶ力を高めるために、①個別最適化された学習指導、②心構え、③学習の基本的な取り組み方、④習慣の形成を教える必要がある。
3. 「共育」について、生徒に学びや成長を求めるだけでなく、私たち自身も学び成長し続けることや、生徒への教育を通じて私たちもともに成長していく。
4. 生徒の成長が自分にとって学びになったことを感謝の気持ちとして伝える。

16

16

活動③ 事後研修での学びのふりかえり



5. 「共創」について、創意工夫、改善、成果成長、やりがいなど付加価値を生み出す場として、「気づき」を共有し、学びを共有する。
6. 質問ができる生徒＝レベルが高いということを把握する。「どこがわからないか」という質問は生徒にとって答えにくい質問であるから、答えやすい質問を意識する。（YesかNoで答えられる質問など）
7. 計算のような過程を書いてほしいものは事前に指示を出すことが必要。またその時には見える化できるツールを活用する。
8. 今回の事後研修のように、活動を終えた後にメンバー間で学んだことを共有する場を設けることが今後の活動のためになる。

17

17

活動④ 国言プログラム・応用言語学・構想発表

- 日時：1月6日（月） 14:40~16:10
- 場所：琉球大学 共有教育棟 3号館 3-201
- 事前準備



・これまでの「共育」プログラム*iplus+*にて取り組んだことと、学んだことについて報告し、今後の調査概要をまとめる。特にサービスラーニング活動において得られた客観的データをまとめる。

18

18



19

19

活動④ 構想発表での学びのふりかえり



1. 生活習慣の関連から自分たちがロールモデルとなることが必要
2. 学校の教員に足りないことも見出す
3. どうして学校へ行けないのか、その障壁となるものの解明
4. 単発的な学習支援、継続的な学習支援での違いを見出す
5. 生徒が将来必要としている学力を確かめる
6. 単発的な活動での関係性づくりの難しさとそこへの着目
7. 学習支援に従事する側の成長や変化の捉え方の視点を記録する
8. データ平均を低くしている要因の分析
9. 生徒と自分たちの学力間の捉え直し

20

20

活動⑤ サービスラーニング：伊江中学校（2回目）

- 日時：1月25日 10:00~12:00
- 対象：伊江中学校の中学3年生 23名
- 場所：伊江中学校
- めあて
 - 事前アンケートを活用して、生徒のレベルやニーズに合わせた学習支援の流れを学ぶ。



21

21

活動⑤ サービスラーニング：伊江中学校（2回目）



22



23